

日田のまちづくりと交通社会実験

大分県日田市建設部都市計画課 原田文利

1、はじめに

日田市は、大分県西部、北部九州のほぼ中央に位置し、木材産業を基幹産業とする人口6万2千人の都市である。江戸時代に九州の幕府直轄地「天領」を統治する西国筋郡代が置かれ、市の中心地の「豆田町」と「隈町」に往時の歴史、文化を色濃く残す歴史的な町並みが形成されている。

現在の豆田町は、長年にわたる官民協働の古い街並みを生かしたまちづくり活動の成果により、年間約50万人の観光客が訪れる本市を代表する観光地となっている。また、隈地区は、「水郷ひた」のシンボルである三隈川（筑後川）の川沿いに温泉旅館が建ち並ぶ観光拠点である。

観光シーズンには、この歴史的界隈に観光客や観光車両が溢れ、ゆっくりと町並みを散策できない状況である。そこで、住民や関係団体と行政とが一体となって、「歩いてときを感じるまちづくり」をテーマに交通社会実験を実施した。

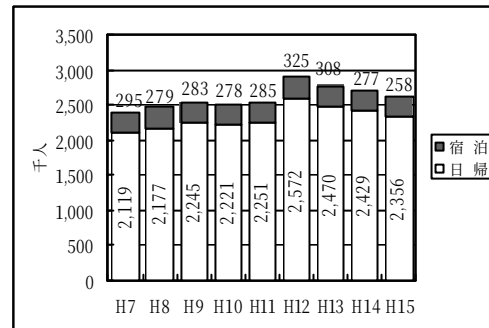


図1 日田市の観光客の推移(千人)

2、日田のまちづくりの課題

豆田町の商店街は、昭和50年頃から土地区画整理事業で駅前地区が近代的な街並みに整備されたことに伴い、市の中心商店街機能が駅前地区へと移行し衰退の途をたどっていた。これに危機感を抱いた地元商店主や地区出身者が、豆田町を象徴する「天領祭り」の創設、伝統行事の「祇園山鉦」の復活などのイベントを起こし、また平常時でも人が訪れる町を目指し伝統的な家屋を利用した資料館や店舗を開くなど、住民リードで地域の文化や残された古い町並みを活かしたまちづくりを展開してきた。昭和59年に元掛屋であった「草野本家」で江戸時代のお雛様の一般公開が開始されてから観光客が増加するようになり、平成元年からは他の商家も参加して「天領日田のおひな祭り」に発展したことから、現在では期間中、約15万人の観光客が訪れる市を挙げての一大イベントになっている。

市もこのような住民主導のまちづくりを応援する形で、古い建物の実態調査や活動拠点施設となる「天領日田資料館」を開館するとともに、平成4年には市条例に基づく都市景観形成地区に指定し、道路の修景整備や地区内の建物等の修理修景に対して支援するなど美しい街並み景観の保全に努めてきた。このような官民協働の取り組みの結果、衰退の危機にあった豆田町は本市を代表する観光地となり、今日大いに賑わいをみせている。

その反面で持ち上がっているのが交通問題である。地区を南北に貫く2本の道路は、昔の地割を形成している狭隘な道路であるにも関わらず、大型バスなどの観光車両や地元の通過車両等が多く進入しているため度々渋滞を引き起こし、観光客や地域住民の安全な通

行が阻害されている。そのため、以前から「一方通行」などの通行制限の必要性が地区内外で話題となっていた。

平成 14 年に地区全世帯を対象に行ったアンケート調査結果においても、「通過交通が増えたこと」や「危険で歩きにくいこと」が豆田らしさを失っている原因や、生活上の問題点の第 1 位に上げられており、観光客の増加によって、「道が危険になったこと」や「駐車場が不足していること」など、交通上の問題が豆田の魅力を損なっていると危惧する意見が多く出されている。



写真1 豆田の往時を再現した天領まつりの模様



写真2 上町通りの渋滞状況

一方、隈地区など他の中心商店街においては、郊外大型店の進出や空き店舗の増加等により本来の機能を失いつつあり、街づくりの課題となっている。さらに隈町の旅館街では、宿泊客が減少しており、市全体の観光客数においても平成 12 年をピークに年々減少している現状にある。このため、隈地区では、関係住民で「隈のまちづくり委員会」を結成し「隈のまちづくり計画」を策定した。平成 12 年には、この計画を網羅する形で「日田市中心市街地活性化基本計画」を策定して総合的な街づくりの観点から、市街地の整備改善と商業等の活性化を一体的・集中的に展開を図ることとしている。

これらの状況を踏まえて、平成 14 年には、行政機関、学識経験者、交通事業者、商店街、自治会等住民代表等で構成された「日田市まちづくり交通計画協議会」を発足させ、日田市のまちづくりの課題を、「歴史的界隈における魅力の向上」、「観光拠点相互の交流促進」として、交通対策面から課題を支援できる施策の検討を行った。さらに検討した施策を実験という形で実際に体験してデータの蓄積や評価を試みる必要があるとして社会実験を実施することとした。



写真3 ワークショップの様子



写真4 まちづくり交通計画協議会の会議風景

3、社会実験の実施

社会実験の内容については、地域住民や商工会等関係団体及び行政職員等で町探検などのワークショップを開催して検討し、その内容を協議会に提案して5種類の実験メニューを決定した。このワーキングメンバーが中心となって社会実験実行委員会を組織し、地域住民や関係団体と連携した体制を整えて実施にあたった。

なかでも自動車コントロール実験の交通規制は、住民生活や商業活動に影響を与えることから、特に住民の理解と協力が不可欠なため、自治会、商店街単位に懇談会や説明会を幾度も重ね、具体的な交通規制方法の決定合意に至るまでには長い時間を要した。

次に、実験の広報告知については、市報を通じて趣旨や内容を市民に周知するとともに、市のホームページに専用コーナーを設けて、協議会や準備活動を随時発信した。また、地区の各戸には文書やチラシを配布し協力を願い、市外に対しても市の一大イベントである「ひなまつり」との連携を図り実験情報を発信した。実験スタッフは、一般公募と地域住民をはじめ旅館組合、観光協会、商工会やまちづくり等関係団体や行政の職員などに協力を要請し、延べ800名の方にボランティアで参加をいただいた。

実験は2期に分けて、第1期は、平成15年11月15日（土）、16日（日）に、隈地区で屋形船を観光客の送迎に活用する「パーク&シップライド実験」を、第2期は、翌年2月21日（土）、22日（日）に「おひなまつり」で混雑している豆田地区を中心に、歩行環境の改善と観光客の回遊促進を目指した残りの実験を、市民と一体となって実施、体験することができた。実施した実験概要は次のとおりである。

【パーク&シップライド実験】

隈地区の旅館街への観光バスの乗り入れ抑制による交通緩和と、新たな観光資源の開発をねらい、旅館組合とタイアップして観光バスを三隈川の対岸に駐車し、観光客を対岸から屋形船で送迎した。

【歩いて時を感じるための自動車コントロール実験】

豆田の街並みをゆっくりと歩いて楽しんでもらうために、大型車は、豆田地区への進入を禁止し、一般車については、案内板などで駐車場への誘導を図った。

【観光拠点間の回遊促進を目指した連絡バスの運行実験】

駐車場と豆田、中心地、隈地区の観光拠点を連絡するバスを20分間隔で運行した。

【環境と観光を融合した、放置自転車を活用したレンタサイクル実験】

5箇所の貸し出しブースを設けて、放置自転車を修理したレンタサイクルを実施した。

【天領日田の魅力と交通情報をお知らせする情報提供実験】

日田ICや幹線道で駐車場情報や推奨経路情報を提供するとともに、駐車場や6箇所のインフォメーションで交通や観光情報などを提供した。



写真5 パーク&シップライド実験

4、実験の成果

豆田地区での「自動車コントロール実験」は、いつもより歩きやすくなったと感じた人を倍増さ

せ、隈地区での「パーク&シップライト実験」でも、いつもより歩きやすいと答えた人が過半数を占めるに至った。今回の実験の大きな目的に、観光地と近隣商業地という2つの顔を持つ歴史的界隈における交通整理手法を見出すという点にあったが、大型車の抑制は歩行環境の改善に大きな効果を持っていることがわかった。今後の具体的対策を検討する上で貴重なデータを得ることができたと言える。

また、拠点連絡バスやレンタサイクル利用者の半数が豆田と隈を回遊していたことから、こうした移動手段の充実が拠点間の回遊促進に一定の効果があることもわかった。

一方で、商業や生活に影響を与える交通規制の本格導入には、住民や商業者の合意形成に多くの時間を要することが改めて浮き彫りになったこと、屋形船やレンタサイクル等の費用負担、運営・実行主体の問題など、実行面で解決すべき課題が残った。



写真6 拠点間連絡バスに乗り込む観光客



写真7 レンタサイクルの貸出し風景

5、おわりに

今回の実験は、「天領日田～歩いて時間（とき）を感じるまちづくり社会実験」と銘打って、長年の懸案であった屋形船の活用や豆田地区の通行規制を試行し、多くの方々がこの実験に参画、体験できたことは、官民協働のまちづくりの取り組みにとって大きな成果になったものとする。

また、豆田地区は、町並み保存に対する住民意識が非常に高く、より質の高い町並み形成を図るため伝統的建造物群保存地区の指定を目指していたが、実験後の7月に地区指定が決定された。歩きやすい道路づくりのための交通規制の課題は残っているが、町並み保存計画と合せて、町本来の暮らしやすい生活環境を実現させるための更なるまちづくりへの取り組みが期待でき、今後は「くらしのみちゾーン」計画等で歩行環境の改善を図る具体的な施策を行っていく予定である。

最後に、豊富な実験内容のため、準備段階から大変な作業であったが、ともに苦勞して実験を乗り切った住民やスタッフの方と、いろいろな地域づくりについて議論ができるようになったこと、実験に協力いただいた観光客から、「よかった」と言った喜びのことばや、「多くのスタッフが町を良くしようと懸命に動いている姿に、町の活気を感じる。」と言った激励のことばをいただいたことは、もう一つの実験の成果ではないかと考える。さらに、こうした官民一体となった感動を風化させないように、継続的な実践へつなげていくことが重要であると考えている。